

サクラランボは涙の味

長谷川 乃布子

丸山三丁目

一九四一年（昭和十六年）秋、女学校二年の私達は報国隊と称し、向台や和田堀の報国農場（宝仙寺の土地であったろう）に行つて、甘薯の苗を植えたりわずかな小麦を刈り取つたりして、食糧増産に精出す日が増えていた。教科では英語が敵性国語であるといわれ、次第に時間割りから消えていった。

一九四二年四月十八日、三年生の新学期が始まつたばかりの昼休みであった。日の丸とは違う星型を付けた黒い飛行機が一機、屋上すれすれに西の方へ飛び去るのを見た。異様な雰囲気にも包まれて学級中が大騒ぎになった。何とはなしに太平洋戦争の重大さを感じたころであり、この一機の襲来は将来を暗示するようで不気味でたまらなかつた。

騒ぎからだいぶ遅れて空襲警報が発令され、全校生徒が地下室に待避した。かねて教わつた通り床に伏せて両手の親指で両耳を、四本指で両眼を覆い口で呼吸をする。私の黒い網膜には、割れた腹から内臓が流れ出している自分の凄惨な最期が見えた。それ以来、いつかはこのようになってしまふのだと幾度観念し

たことだろうか。

勉強を置いて勤労奉仕に明け暮れることが次第に増えていった。田原町まで航空食を包装しに行つたが、食糧が欠乏してきただ当ても不思議に、この一粒を口にしようなどと思わなかつた。誤つても落とさないようにと無言でただ小さなろう紙に包み続けた。まるで機械そのままの作業だった。

男の先生は国民服・ゲートル姿で、和服姿の素敵だった女の先生は地味なモンペ姿で付き添ってくださった。作業が終わると厳重な数量検査のあったことを覚えている。

一九四三年五月十二日から、朝礼時と授業ごとに必勝祈念の黙想が始まつた。目を閉じると浮かぶ自分の凄惨な最期の姿を振り払うのに、ひそかに閉口していた。

翌一九四四年六月二三日だ、私達五年生に被服廠への動員令がくだつたのは。すぐさま適性確認の身体検査が行われた。いよいよ私も学徒動員に加わるのだと決意が固まつた時、血沈が異常という理由だけで、何と動員から外されてしまった。

落第！不適格！これは生まれて初めての屈辱だ。身体は小粒でも体力章検定で上級を取ったのに、なぜ役立たずなのだろうか。

合格の書き付けをもらう友達すべてが羨ましく、身体検査が恨めしかった。母の前で言いようもなくやしさがこみ上げて泣きに泣いた。「被服廠に行くだけがお国のためではない」と慰められれば、ますます「何と言おうともう元には戻らないじゃないか」と、煮えくり返る胸の中で反抗した。

「食べて機嫌を直しなさい」

山形から届いたサクランボの大盛りが目の前にあつた。八人家族の我が家では、今までこんなに沢山分けてもらえなかったのに。促され一粒口に運んだサクランボから母の思いが伝わった。それから泣き泣き食べたサクランボは、涙と同じ味だった。晩春、店頭でサクランボが並ぶと、この時の無念さがまぎまぎと甦り泣きそうになる。それとともに落第の烙印も今もって消えることはない。

現在のように電話もなく、被服廠の様子など知るよしもない。みんなが赤羽に通つてから三週間後の七月二一日から「人並み以下」の私達数人は、東中野にある三越軍服縫製工場に配置が決まった。やつと番が来た。

三越軍服縫製工場では、軍服地を一度に何着も裁断するため、決められた長さに平らに重ねていく作業が割り当てられた。

女学生以外の工員は、裁断したり縫ったりするので、作業場はいつも動力ミシンの音が響いていた。

冬軍服の厚いラシャ地一巻は、直径三〇センチ以上あってひとかかえがやつとである。工員達はそれを楽々と持ち上げて、倉庫から運び出す。しかし、女学生では二人がかりでなければ運べない。軍服のカーキ色は、少女の夢を戦時色に塗りつぶす魔力があつて、みんなよく働いた。

お国のためばかりではない、「人並み以下」かどうか見てくれと意地になつた私は、工員並みに一人で一巻を長い裁ち台の所まで運んで行つた。人より一巻でも多く運ばなければ気が済まず、制服もモンペの紐も汗と糸屑にまみれた。苦しい主張をしたものだ。

防空頭巾を肩から斜めに下げて弁当を食べる昼の時間に、ふだんはこわい係長さんやミシン係の女工さん達とおしゃべりを楽しんでる友達の横で、ずうっと寡黙な私であつた。社会に出てから積極的に話すことが不得意な性分は、自信を失つた学徒動員に起因するのかもしれない。

二、三日に一回、作業後工員より先に友達といっしょの入浴ができた。空襲警報のサイレンが鳴りはしないかと気にしながらではあつたけれど、これは唯一の慰めだった。乗り降りした中井駅は、学徒動員時代には予想できなかった急行通過駅となつてしまい、戦争の傷跡を胸に残す人々も少なくなつてきたと

思う。

